

委員会名	自己点検者（委員長名）	①当該年度の活動内容の概要 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	②委員会内での自己評価と問題点の抽出 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	③次年度の改善方策 （箇条書きで良く、参考資料は不要）
学則等検討委員会	学則等検討委員長（杉山重夫）	<p>2022年度は以下の12件の学則等の検討が依頼され、委員会においてその原案を検討し、その結果について依頼先に伝達した。</p> <p>①附属薬局運営規程、②明治薬科大学における学生の懲戒規則の運用指針、③客員教授等に関する規程、④自己点検・評価委員会規程、⑤内部質保証に関する規程、⑥男女共同参画推進委員会規程、⑦地方枠奨学金規程、⑧医療薬学会の専門薬剤師研修制度、⑨研究倫理審査委員会規程、⑩育児休業時の研究補助者当に関する内規、⑪大学院規程（学費減免）、⑫研究活動上の不正行為への対応に関する規程</p>	<p>1）当委員会において、円滑に学則等の案の検討がなされ、確実性の高い学則等の施行に寄与した。</p> <p>2）まれなケースではあるが、検討依頼が集中した際、回答までに時間がかかった。</p>	<p>検討依頼が集中した際は、優先順位を付けて検討することが望ましい。</p>

委員会名	自己点検者（委員長名）	①当該年度の活動内容の概要 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	②委員会内での自己評価と問題点の抽出 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	③次年度の改善方策 （箇条書きで良く、参考資料は不要）
FD委員会	委員長（中館 和彦）	<p>(1) FD委員会を中心に、各委員会や事務職員からの提案も含め、教員の教育の質向上のための方策を検討している。</p> <p>(2) FD研修会として、2回の研修会を実施した。①学習支援の質的向上のため、「今の時代における学生支援について」と題した研修会を実施、②大学発の知財維持の観点から、「知財、産学連携を活かした創業研究」と題した研修会を実施した。</p> <p>(3) 学生による授業アンケートを実施し、高評価の教員を選抜し表彰した。</p>	<p>(1) 本学におけるFD活動は概ね適切に実施されている。</p> <p>(2) 年複数回のFD研修会の実施により、教員のモチベーション向上に寄与している。</p> <p>(3) 今年もコロナ禍で集まった委員会の開催が困難であったため会議はメール会議で行った。各委員からの意見は反映できていると感じられるが、コロナ禍の終息後には、対面での会議も検討したい。</p>	<p>(1) FD研修会の適切な開催時期や研修内容を検討した上で、学事スケジュールとの調整を行ない開催する。また、FD研修会など現在行っている活動意外に、コロナ禍の終息後におけるFD活動の場を検討したい。</p>

委員会名	自己点検者（委員長名）	①当該年度の活動内容の概要 (箇条書きで良く、参考資料は不要)	②委員会内での自己評価と問題点の抽出 (箇条書きで良く、参考資料は不要)	③次年度の改善方策 (箇条書きで良く、参考資料は不要)
研究倫理審査委員会	研究倫理審査委員長（石川 洋一）	<ul style="list-style-type: none"> ・研究倫理審査委員会規程に基づき研究倫理審査委員会を適正に実施、また学内の研究倫理適正化に向け提言を行った。 ・委員長が副委員長を指名できる規定に則り、副委員長1名を配置して審査の適正化を計った。 ・2020年度からの2組の審査担当による迅速審査方式を3組に増員して更なる審査の円滑化を計った。 ・令和3年3月の倫理指針制定及び令和4年6月のガイダンス改訂に伴い明治薬科大学研究倫理審査委員会規程を改訂した。 ・通常審査・迅速審査・中央一括審査等に係るフローチャートによる手順書を発行した。 ・学内研究用採血の手順発行およびそのための保健室契約を開始した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・研究倫理審査委員会は適正に実施され、また学内の研究倫理適正化に向けた提言も適正に行われた。 ・研究者からの研究の終了報告・継続申請等の提出遅れによる問題が見られた。それを防ぐため教員会議にて注意喚起を行った。 ・検体資料等の保管を研究者を責任者として実施しているが、人を対象とする研究が進む中、学内の管理体制が不十分な印象を受ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・試料・情報保管に係る責任者を大学として定め、保管管理手順書を作成するべきであることの提言を続ける。 ・研究の終了報告・継続申請等の事務対応を確実にするため教員への注意喚起の継続、ならびに事務担当の増員を求める。

委員会名	自己点検者（委員長名）	①当該年度の活動内容の概要 （簡条書きで良く、参考資料は不要）	②委員会内での自己評価と問題点の抽出 （簡条書きで良く、参考資料は不要）	③次年度の改善方策 （簡条書きで良く、参考資料は不要）
バイオハザード安全委員会	オハザード安全委員長（森田 雄）	本学において取り扱う病原体等の安全管理に努め、本学における病原体等に起因して発生する曝露、及び感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律に基づく事故等の未然防止を図る。	新たな届出、認定申請はなかった。 特に問題点は抽出されなかった。	特になし

<p style="text-align: center;">①当該年度の活動内容の概要 (簡条書きで良く、参考資料は不要)</p>	<p style="text-align: center;">②委員会内での自己評価と問題点の抽出 (簡条書きで良く、参考資料は不要)</p>	<p style="text-align: center;">③次年度の改善方策 (簡条書きで良く、参考資料は不要)</p>
<p>薬品管理システム運営委員会を中心に、財務課や施設管理課と連携しながら、薬品管理システム（CRIS）を利用した薬品の納入・廃棄・集計の管理を行った。</p> <p>（１）薬品納入・廃棄について：研究室から既定のフォーマットで薬品を発注し、薬品卸入れ業者が納品データを大学へ送信する。業者が薬品を搬入後、財務課員が検収して薬品バーコードを貼付し、各研究室へ納品する。薬品使用後は廃棄薬品のバーコードを回収し、財務課員が検収室で廃棄手続きを行う。</p> <p>（２）薬品集計について：1. 東京都が指定する適正管理化学物質と、化管法に基づくPRTR指定化学物質について、本学における納入・使用・在庫状況を、東京都と関係省庁に報告した。2. 施設管理課が各研究室の薬品在庫状況を確認し、消防法による指定数量が超えそうな研究室に注意を促した。</p> <p>（３）保守について：1. CRISデータベースのマスターデータの更新を行った。2. CRISのサーバOS更新に伴い、納品及び検収日の調整を行い学内に周知した。</p> <p>（４）その他：1. 各研究室の不用薬品の回収を施設管理課が2回行った。2. 昨年度作成した薬品在庫集計マニュアルの改訂を行った。3. リスクアセスメント（RA）対象薬品の検索方法を告知した。</p>	<p>（１）CRISを用いた薬品管理については、概ね適切な運用が行われている。</p> <p>（２）CRISによる集計操作がやや煩雑であり、化学物質に熟知していないと適切に集計できないという問題点がある。</p> <p>（３）定期的なデータバックアップについて確認を行う。</p>	<p>（１）集計操作が誰でもできるように、CRIS上で本学独自の操作手順（アルゴリズム）作成を検討する。</p> <p>（２）引き続き、各研究室へ薬品の棚卸を行うように促す。</p>

委員会名	自己点検者（委員長名）	①当該年度の活動内容の概要 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	②委員会内での自己評価と問題点の抽出 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	③次年度の改善方策 （箇条書きで良く、参考資料は不要）
公開講座・シンポジウム委員会	松井勝彦	<p>地域住民との交流を深めること、また、子どもたちの理科離れを防ぐことを目的として、年間3つの公開講座を開催している。（1）2022年7月25日（月）より、1ヶ月間の期間限定Web配信にて明治薬科大学市民公開講座（講師：日本調剤株式会社 在宅医療部部长 長谷川寛 先生、テーマ：ここだけの話ですよ！薬局のあれこれ教えちゃいます！！）を開催した。（2）2022年7月26日、27日に日本医科大学との連携公開講座（講師：明治薬科大学准教授 松本靖彦 先生、テーマ：甘いものを食べるとどうなるか？）を開催した。（3）2022年10月15日（土）より、1ヶ月間の期間限定Web配信にて明薬祭特別講演（講師：河北医療財団 河北総合病院 薬剤科副部长 高嶋啓輔 先生、テーマ：薬剤師原点回帰 ～国民の健康な生活を確保する～）を開催した。開催した公開講座は、いずれも好評であり、多くの参加者を得た。</p>	<p>（1）計画した公開講座は、概ね適切に実施された。 （2）連携公開講座は、少人数で実施することで対面式での開催を実現することができた。（3）その他の講座も対面式で実施する必要があると考えられた。（4）Web配信の期間を延長することで、より多くの参加者を得た。</p>	<p>徹底したコロナウイルスの感染防止策を講じることで、完全対面式の公開講座を実施したい。</p>

委員会名	自己点検者（委員長名）	①当該年度の活動内容の概要 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	②委員会内での自己評価と問題点の抽出 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	③次年度の改善方策 （箇条書きで良く、参考資料は不要）
地域貢献委員会	地域貢献委員長（日堂 修）	<p>(1)大学の公開と地域住民への貢献を目的として、4月～12月の第三日曜日に市民大学講座『自然と健康を考える』を、年間36コマ程度の開催を予定していた。COVID-19感染が収束しないため、対面での開催を断念して2回のWeb開催を行なった。</p> <p>(2)清瀬市の『きよせの環境・川まつり』に参加した。COVID-19禍の中、野外での開催は中止となった。市役所ホームページに特設サイトが設けられ、そこで本学の紹介と紫外線に関する動画を公開した。</p>	<p>(1)COVID-19は収束せず、規模の縮小、対面での開催中止はやむを得ない状況であった。</p> <p>(2)youtubeを見ることができる会員が増えたためか、視聴割合が増えた。</p> <p>(3)視聴データの項目を増やした。スマートフォンによる視聴が多く、画像を合わせる必要がある。</p>	<p>(1)COVID-19収束の場合には、従来の対面での開催を行う。</p> <p>(2)現状が改善されない場合には、Web開催を充実する。開催回数を増やしたり、画像を改善する。</p>

委員会名	自己点検者（委員長名）	①当該年度の活動内容の概要 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	②委員会内での自己評価と問題点の抽出 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	③次年度の改善方策 （箇条書きで良く、参考資料は不要）
認定評価委員会	認定評価委員長（川北 晃司）	<p>(1)認定薬剤師研修制度にもとづく当委員会は、学内委員9名および外部委員1名で構成されており、薬剤師生涯学習講座の受講者が認定申請の書類を提出した際に、CPC（薬剤師認定制度認証機構）のルールに則って審査を行う。</p> <p>(2)委員会審査がスムーズに運ぶように、申請書類の事前確認作業を2名の委員と1名の事務員により実施している。</p> <p>(3)委員会を12月までに3回開催した。いずれもメール会議にて実施したが、外部委員には全回来校いただき、認定評価委員長並びに研修企画実行委員長同席のもと、学内で申請書類を確認いただいた。年明けにも複数回、委員会を開催する予定である。</p> <p>(4)審査の結果、2022年4月から12月までに新規2名、更新9名を認定し、認定薬剤師研修制度委員会へ報告した。</p> <p>(5)認定者へ認定証書及び認定薬剤師IDカードを送付した。</p>	<p>(1)本学における認定審査は適切に実施されている。</p> <p>(2)本年度は3年周期で、申請者が多い年に当たる。まとめて認定審査を行うために、認定評価委員会の開催日を決定した際には、ホームページに開催日と申請書類の提出期限を掲載するようにした。</p> <p>(3)研修認定薬剤師の氏名のホームページ掲載は、本人許可を取ってから掲載してきたものの、時代にそぐわないため、掲載を取りやめた。</p>	<p>(1)一部の他ブ`ロ`グ`で電子単位を導入している。まだ本学への申請者で電子単位を提出してきた者はないが、他ブ`ロ`グ`でどのような書類が発行されるのか確認でき次第、本学で必要となる提出書類の周知をホームページで行う。</p>

委員会名	自己点検者（委員長名）	①当該年度の活動内容の概要 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	②委員会内での自己評価と問題点の抽出 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	③次年度の改善方策 （箇条書きで良く、参考資料は不要）
動物研究施設運営委員会	委員長（中館 和彦）	<p>(1)動物研究施設運営委員会を中心に、動物研究施設の運営を実施している。</p> <p>(2) 動物倫理講習会を実施し、実験動物の適切な飼育、実験運用を学生と教職員に促した。</p> <p>(3) 動物管理施設への入退室に際し、カード登録を行い、適切な管理運営に努めた。</p> <p>(4)動物飼育管理者（株式会社JAC）との協議により、適切な運営費を執行した。</p> <p>(5)新規の教室運営教員（教授等）には、当該実験室での動物実験に関しての指導を行った。</p> <p>(6)外部審査のための施設内の管理、書類の点検を行い、外部審査を受けた。</p>	<p>(1)本学における動物研究施設運営委員会活動は概ね適切に実施されている。</p> <p>(2)毎年、春に実施している動物倫理講習会は、今年度はオンデマンド配信と試験にて実施した。実施以降に必要な学生教職員にはその都度実施し、問題なく運営されている。</p> <p>(3)コロナ禍での動物実験の安全な実施のため、適切な準備と対応を実施した。</p> <p>(4)外部審査のため、実験管理区域内の設備の見直し、空調設備のチェックや管理簿等のチェックを実施した。</p>	<p>(1)概ね本年度と同様な運営を実施していく。</p> <p>(2)コロナ禍での対応に加え、コロナ禍終息後の対応に向けて対応が必要なところの有無を検討する。</p>

委員会名	自己点検者（委員長名）	①当該年度の活動内容の概要 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	②委員会内での自己評価と問題点の抽出 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	③次年度の改善方策 （箇条書きで良く、参考資料は不要）
アジア・アフリカ創薬研究センター	アジア・アフリカ創薬研究センター長（深水啓朗）	<p>アジア域に生息する多種多様な天然物を新規創薬の資源と位置づけ、本学の研究者が海外学術協定締結機関とともに「がん、感染症、認知症」などの早期診断、治療薬の開発を目的として、以下に示す研究課題に取り組みます。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. タイ、フィリピンに生息する海洋生物由来抗腫瘍活性イソキノリンアルカロイドを基軸とする創薬研究 2. インドネシアやインドに生息する海洋由来真菌や薬用資源植物の探索並びに機能性生物活性分子の創製 3. 学部生の研究・教育を支援する海外拠点機関との相互交流：新たな実務実習研修先の開拓と継続的な国際交流の展開 	<p>アジア・アフリカ創薬研究センター（AACDD）事業の発展的な再編をめざし、学内における国際交流の活動や組織と連携・集積することで、新型コロナウイルスの影響下においても実施可能な薬学教育研究体制（薬学実践プログラム）の整備について検討する。海外学術協定締結機関の大学院生や若手研究者を中心に、相手国の次世代を担う優れた人材の育成を企図して、従来の創薬基礎分野の国際共同研究に限らず、製剤学や保健衛生学など、相手国から要望が強い新規研究領域における共同研究を積極的に支援する。国内外における国際学術交流の支援事業に応募するなど、本学の新たな国際貢献の拡大を図る。</p>	<p>本年度こそは新型コロナウイルス感染症の影響が軽減し、活動を再開できると期待していたが、予想外に影響が継続したため、依然として国際的な活動が制限される状況である。AACDDの事業に関しては、これまでの研究実績を基にして、学会発表については2件、論文投稿については1報を投稿中である。ただし、後期に入って海外からの入国が緩和されたこともあり、インドから若手研究者を招聘する計画を進めているところである。また、本学の国際交流に関する体制・組織の整備については、越前学長主導の下、次年度には留学生委員会や海外医療研修コースと統合することで担当者間の合意が得られた。</p>

委員会名	自己点検者（委員長名）	①当該年度の活動内容の概要 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	②委員会内での自己評価と問題点の抽出 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	③次年度の改善方策 （箇条書きで良く、参考資料は不要）
男女共同参画推進委員会	男女共同参画推進委員長（小林カオル）	<p>(1) 男女共同参画を推進するための組織的取り組みを目的とした委員会(教員4名、職員3名)を設置し、委員会規定を策定した（7月29日制定）。</p> <p>(2) 育児休業等を取得する教員に対して継続的な研究活動を可能するための研究補助者等の取り扱いを定める内規を策定した（11月24日制定）。</p> <p>(3) (2)の実施に向け、2023年度採用分として人件費の予算申請を行なった。</p> <p>(4) (2)の制度を利用して研究補助者の採用を希望する教員1名に対して、申請手続きのサポートを実施している。</p>	<p>(1) 育児休業時に研究補助者を採用するためのサポートを開始することができた。</p> <p>(2) 職員が代替職員を申請する際、休職期間が何ヶ月からであれば申請できるのか基準が決まっていない。</p> <p>(3) 育児休業時における研究補助者等の採用が可能となったが、介護休業時についても検討が必要である。</p> <p>(4) 育児中や介護中の教員の研究活動をサポートする仕組みがない。</p>	<p>(1) 代替職員の内規を整備する。</p> <p>(2) 代替教員の採用が可能となるよう、準備を進める。</p> <p>(3) 男女共同参画の推進には、意識改革が必要であることから、講演会を開催することを予定している。</p>